日野啓三『ベトナム報道』における言語観

――小説の言葉とは何か――

山根繁樹

はじめに

日野啓三は、一九六四年末から一九六五年夏にかけて、読売新聞社の初代常駐特派員としてベトナム戦争中のサイゴン（現「ホーチミン」）に滞在した。その経験は日野を創作へと向かわせ、一九六六年三月には小説第一作『向う側』[1]が発表されている。また、同じ一九六六年の七月には『広場』[2]を、一一月には『炎』[3]を発表してもいる。これらがベトナム体験を契機に書かれたということは、日野自身が繰り返し述べていることでもある。

〈1964年（昭39・35歳）～65年
米軍本格介入時期の南ベトナムへ特派員に出る。7か月間。様々な剝き出しのものを見、茫々と溶解する自分を感じ、このリアリティーはもう評論では捉えられない、小説を書こうと決心する。[4]〉

確かに日野は、学生であった一九五〇年代初頭から「新人批評家」[5]として「近代文学」などに評論を書いていた。それにしても、〈小説〉が〈評論では捉えられない〉〈リアリティー〉を捉えうるとしたら、それはなぜなのか。日野は、〈小説〉を、〈小説〉の言葉を、いかなるものと考えているのだろうか。一方で、その実作たる前述の作品は、芳しい反響があったとはいえず、単行本に収録されることもなく、そこで試みられた実験的ともいえる方法は、その後の日野自身によって採用されることはなかった。それでも、日野は様々な〈小説〉を書き続け、〈評論では捉えられない〉〈リアリティー〉

を捉えようとし続けたのだと考えることはできる。

ところで日野は、《一九六六年十月二十一日》と日付を記された「あとがき」を持つ、ルポルタージュ『ベトナム報道　特派員の証言』[6]（以下『ベトナム報道』）を、初の著書として上梓している。そこにあるのは、初代常駐特派員としてベトナム戦争に関わった、「新聞記者」としての日野の言葉であり、いわば〈小説〉とは異なる言葉で綴ったベトナム体験である。そして、これは、前述の初期〈小説〉とその執筆時期を共有していると考えられる。

それでは日野は、その『ベトナム報道』をいかなる言葉で書き綴ったのか。本稿では、〈小説〉ではない『ベトナム報道』を読みつつ、それ以前に書かれた日野の〈評論〉にも目を配りながら、日野の言語観を探ってみたい。それは、〈評論では捉えられない〉ことの内実を問うことになるかもしれない。だが、もちろん、日野の〈小説〉にかける想いが実作において実現されているかどうかは別問題である。したがって、本稿の目論見は、あくまでも『ベトナム報道』の言葉、および日野の〈評論〉の言葉がいかなるものかを明らかにすること、そして、それがどのように〈小説〉を要請するのかを考えることにある。

一　『ベトナム報道』の言語認識

そもそも、『ベトナム報道』とは、いかなる内容を持つものであろうか。同書の「あとがき」には、次のように記されている。

《初め現代ジャーナリズム出版会の丸山尚氏は、体験にもとづく〝報道論〟を書け、といってくれたのだが、でき上がったものは報道論をダシにした〝体験記〟のようなものになってしまった。しかも特派員の体験という枠をはみ出して個人的な内的体験に逸脱した傾向さえあるが、既成の報道の公理と限界を守りとおせるようなまともな状況ではなかった、つまり私個人のすべてをあげて対決しなければならぬような状態だったのだ――ということで了解していただいた。》

日野は《報道論をダシにした〝体験記〟のようなもの》というが、それは、その《体験》が《既成の報道の公理と限界》を逸脱せざるをえないギリギリのものだったという自負を、控えめに述べたものである。なぜなら、本文中に述べられているように、ベトナム戦争を報道しようとした日本のメディアは、史上初めて世界の舞台に出て、自らの責任において直接の取材と報道を行ったのであり、その試行錯誤についての自覚なしに、《報道論》などありえようはずもないからである。そして、確かに『ベトナム報道』は、「報道」とは何か、「言葉で伝える」とはいかなることか、といった問題についての、日野自身の《体験》と試行錯誤を綴ったものになってい

るといえる。では、日野は、それらについてどのように述べているのであろうか。

まず、日野は、ほとんど予備知識もないままにベトナムに入った後、あらゆる事象の見取り図を自らが構築しなければならなかった状況を、次のように述べている。

《ここには、情勢の全体を奥行と陰影をもって説明してくれる人はいなかった。奇妙さは奇妙さのままに一つの生きて動くヴィジョンとして事態をまとめてくれる人もいなかった。ヴィジョンは自分でつくるより仕方がない。私は新聞記者だ。空白は自分でひとつずつ埋めてゆくより仕方がない。だがその空白はいつ埋まるのか。》

何も知らぬ状況の中に置かれ、すべてを自分自身で把握しなければならなくなったというだけではない。そこで起こっているのは、そもそも敵と味方の区別すら曖昧な内戦、ゲリラ戦であり、それを単純な「力」によって制圧しようとするアメリカの圧倒的な戦力の投入による事態の複雑化なのである。したがって、事態の把握は、単純に時間の経過によってなされるようなものではない。日野は、そこで事態を把握するために必要なことを、次のように述べている。

《〝事実〟という言葉を口にするとき、私は周囲からくっきりと区切られてそれだけで存在する実体を思い浮かべることはできない。

また〝客観的〟というとき、毅然として冷徹なレンズのごとき立場と姿勢を考えることはできない。

私がベトナム報道を考えるとき、事実それ自体がまず問われねばならず、客観性という立場そのものが、つねに眺め直されねばならないのだ。》

つまり、日野は、ベトナム戦争の取材において、《事実》や《客観性》そのものを問わねばならなかったのであり、それはすなわち、「言葉」の意義そのものを問うことであった。だが、日野自身にとってそれは、批評家として活躍した時代から考え続けたことでもあったはずである。

《私はかねてから言葉というものを単に意味伝達の手段とだけは考えていなかった。概念と形式論理だけではなく、感覚と想念の波動と陰影そのものとしての言葉、矛盾を矛盾のままに捉える弁証法的な思考に、自分を訓練してきた。ただ東京のデスクの仕事では、そうした文学的な自分の発想と表現を意識的におさえてきたが、いまや未知の世界に、それも動乱の真っただ中に放り出されたいま、自己制御の余裕などはすでに不可能だった。

自分の全感覚、全神経、全思考能力を開いて、自分の内部に納得のゆく手ごたえを与える反応を、確実につかまねばならなかったのだ。》

《事実》や《客観性》が確かで揺るぎないものであるなら、言葉は《単に意味伝達の手段》であるだろう。だ

が、日野は、言葉をそのようなものとは考えていない。《感覚と想念の波動と陰影そのものとしての言葉》とは、世界を捉えることそれ自体であるような言葉の意であろうが、日野はそれを《文学的》と形容している。それは、そのような「言葉」が、日野が批評家として思考する中で発見し、自覚した言葉の様態であることを意味しているだろう。つまり、そのようなものとしての「言葉」は、本質的ではあっても一般的ではない、という認識が、日野にあったことを示していると考えられる。

しかし、日常的で一般的な、言葉についての認識は、ベトナム戦争の現場において通用するものではなかった。だからこそ日野は、より本質的な言葉についての認識そのものを明示しながら、『ベトナム報道』を書き進めていかなければならないのである。

《「新聞は読者に判断の材料を与えればよい、判断は読者がする」というもっともらしい意見がある。もちろん記者の意見を露出させた記事は、拙劣な記事だ。そんな記事はまず本社のデスクで没になる。だが材料そのものでさえまったくの記者の主観なしに集め、書けると考えるのは神話にすぎない。

材料を材料と認知するところにまず判断が働いており、それを文章にするときさらに、判断が働く。》

《新聞記者たちの中には、文章なんてどうでもいい、事実と論理が伝わりさえすればいいんだという考えのものも少なくないが、本当にわかってもらうためにこそ、文章に苦労すべきだと私は確信している。いわゆる美文や名文といった修辞（レトリック）の問題ではない。「決定的」とか「重大化」とか、ことさら深刻な形容詞を安易に使って深刻めかすことでもない。表現そのものの問題である。まともな事実と論理の成立しない相補性と不確定性原理の動乱の世界では、素朴リアリズムと形式論理を越えた認識と表現の工夫が当然必要なのだ。この場合、言葉はもはや伝達の手段ではなく、認識の姿勢そのもの、表現の内容そのものとなる。》

おそらく、日野自身の中でも、日常的で一般的な認識における「言葉」が機能する世界が、実感されている。だからこそ、《東京のデスクの仕事では》といった「場合分け」がなされてきたのであろう。その意味で、日野にとって新聞記者としての仕事は、《文学的》な批評家としての仕事とは、言葉のレベルで異なるものだったのかもしれない。

しかし、その新聞記者としての仕事をすべきベトナムにおいて、より本質的な認識における「言葉」が必要とされた。そこでは、批評家として「言葉」について考え続けてきたことが、当然活かされているだろう。ただ、それだけではなく、それとは逆の方向に、つまり、批評家として《文学的》であった姿勢や認識に対して、ベトナムの現実はより徹底した姿勢や認識を要求するものだ

ったのではないだろうか。いまや求められているのは、《文学的》か否かといった態度の選択ではない。日野は、否応なく言葉の本質に向き合わざるをえない現場に立たされていたのである。そして実は、それまで考えられてきた《文学的》とは、ギリギリのところで「物語化」を拒もうとすることであったはずなのだが、それについては後述する。

『ベトナム報道』において日野は、より本質的な言葉についての認識が要求されるベトナム戦争の現場を、より本来的な世界として捉えている。

《同じように、誰が書いてもほぼ同じ記事ができる社会的事件の方がむしろ特殊な例であって、観測主体との相互作用を無視して対象そのものの姿を捉えることはできない。ベトナム戦争のように対象の姿は石塊のように明確にではなく、不断にうごめきまわるアミーバの不定形のうごめきを確率的に示唆することしかできない、という動乱渦中の政治的事件の方が、世界の基本的な在り方ではないかと私は考える。》

捉えがたい現実の中にありながら、それこそが《世界の基本的な在り方》だと考えるとき、いわゆる平穏な日常的現実は仮構されたものということになろうか。その仮構は、我々を取り巻く大小無数の「物語」によって成されているということができるかもしれない。それは、次の中にある《決まり文句の眼鏡》《定型的発想》にも通じているといえよう。

《私は繰り返し書いてきたが、いわゆる事実というものはそれほど確定したものか、それほど信頼しうるものなのか、一体誰が、何がそれを事実と保証するのか。決まり文句の眼鏡をはずして事象を凝視するとき、いわゆる事実らしきものの形は忽ちぼやけ重さは失われる。あるいは誰かが、特定の権力が、特定の政治的見解がその事実をすでに着色し、荷電し、手際よく配列しているその手つきが、はっきりとみえてくる。

ここまでは見てよろしい。それ以上は見ても考えてもいけないという垣根がみえてくる。その垣根をあえて踏み越える、自由で不安な意志が大切なのだと私は強調したい。

政府の検閲その他の外的制限のことをいっているのではない。みずからの内部に固定された公理の枠、習いおぼえ身についた定型的発想と文章の垣根を越えることをいっているのである。》

ここまでの日野の言語観は、いわゆる言語論的転回以後の言語観からすれば、特別なものとはいえまい。言葉によって世界が見出されるのであって、その逆ではない、とすれば、言葉を離れた《事実》なるものを前提することができないのは当然だからである。これが、いわゆる言語論的転回以前の言語観であれば、言葉を離れた事物の実在が前提となり、言葉はその事物に貼り付けら

れた名称に過ぎなくなる。それは同時に、言葉やその言葉を扱う主体を離れて、《事実》や《客観性》があるという立場ともなろう。

ただし、言語論的転回以後においても、日常的で素朴な実感としては、《事実》や《客観性》あるいは「事物」が確かなものとしてある、と感じられることはある。むしろ、そのような転倒された素朴な実感こそが、日常的な世界を支えているということもできる。日野が批判するような、《客観的》と信じられた《新聞記事》は、そのような日常的な世界で《単に意味伝達の手段》として流通し、その世界を支えてもいるはずである。そうであるとすれば、日野が『ベトナム報道』で説く、あるべき報道の言葉は、流通する物語的な了解を追随するようなものではありえない。だが、物語的な枠を完全に排除してしまえば、《新聞記事》自体が不可能であろう。

おそらくこのギリギリの問いこそが、『ベトナム報道』なのである。日野は、先の引用にもあったように《ヴィジョンは自分でつくるより仕方がない》という形で、相対的でしかない自己の立場を自覚しつつ、謙虚にそこに立ち続けたのであり、その意味では自らが見出す物語の相対性と限界自体を、『ベトナム報道』に記したのである。

二　批評家日野啓三の言葉

それでは、批評家としての日野は、《文学的》な仕事において、どのように言葉に向き合ったのか。日野は、社会や歴史、芸術に関して原理的な考察をした評論と、個別の作品を扱った評論を書いているが、それらは、問題意識において通底している。まずは前者の例として、一九五五年に書かれた「焼跡について」[7]を取りあげてみよう。

《私たちにとって問題だったのは、幾つかの可能性ではなく、唯ひとつの現実性と面つき合わせて、心に確かな緊張を確保することだった。天皇伝説も戦争の神話も決して私の存在を保証しはしなかった。あらゆるイデオロギーは、すでに歩いている者に道を教えるにすぎない。歩く力を与えることはできぬ。道などはなくても自分の足で歩く以外に仕方はなく、歩いてみれば大地の抵抗が歩く力をつくり出すのだ。大地は敵意をもって足に抵抗する。大地は決して人間を歩かせるために創られたのではないからである。

まともな家は私に様々の人間的な想いを誘うが、焼跡の石とセメントは私から人間的な曖昧さを剝ぎ取ってゆく。私のために存在するのではないそれらの物、私を何ら必要とせずにそこに在るそれらの物――私とそれとの唯一の共通点は、それがそこに在り、私がここに在る、ということだけだ。その

ものが決定的に私と異質である度合に応じて、私はきびしく私の存在を確かめることができた。そうした意味を失った物の無意味さは、人間のこしらえあげる諸々の意味の曖昧さに比べて、いかに確実であったことか。》

これは、日野が最初の評論集『存在の芸術』[8]の冒頭に置いた文章の一部である。《イデオロギー》や《意味》づけを拒み、ただ《在る》という一点において《存在を確かめ》るのだという態度表明は、そのようにして存在を捉えたいという希望とともに、日野の評論に繰り返し現れてくる。そこでは、人間による《意味》づけの《曖昧さ》が繰り返され、そのことによって、いわゆる日常的な現実世界そのものに対する不信感が表明されているといえる。

このような表明は、日常的な現実世界における物語の力を相対化し、それに縛られた《存在》を解放しようとするものということもできる。日野は、少年期の戦時体験や青年期の政治体験を通して、物語に取り込まれ呪縛されることの息苦しさや違和感を実感したのであろう。そして、評論においては、《存在》を解放すべく様々に思考を重ねていったのであった。

次に、後者の例として「大岡昇平『野火』論　孤独の密度」[9]を取りあげる。日野はまず、《文学作品にとって大切》なものを指摘する。

《文学作品にとって大切なのは、決してナマの形で作品の中にもちこまれた（登場人物の会話や作者の説明など）思想の断片でも、人生論的教訓（いわゆる主人公の生き方！）でも、筋の面白さでも、またモチーフの誠実さでもない。そういうものは結局、作品という小宇宙に読者を誘いこむためのオトリでしかありません。丁度、正義が戦争に人をひきいれるオトリでしかないように。そして戦争そのものが、正義とは無縁なひとつの実体であるように、文学作品の実体を形づくるのも、オトリとは別の確かなあるものです。》

ここで述べられる《あるもの》は、《石や木や大地と同じような手応え》を持ち、《私たちの精神に快いまでの抵抗感を与える》とされている。では、『野火』におけるそれは、いかなるものであろうか。日野は、『野火』の主人公が橋桁に腰を下ろして眺めた小川を描写した文章を引用した後、次のように述べる。やや長くなるが引用してみよう。

《前の例と同じように、少し注意深く読めばこの文章も単に対象を固定して記述し模写し描写する文体でないことがわかると思います。極度に短く句切られた文節、ひとつの文節が加速度を残したまま不意にとぎれると新らしい文節が水底から浮上ってくるようにして立ち現われ、それが一瞬流れるように続いたかと思うと急に立ち止るように停止し、次の瞬間再びひた押しに流れ続いてゆくその続き具合。こ

の文章の調子はそのまま渦巻き流れる小川の水の流れだといっていい。（略）さらにここで大切なことは、そうして表現された小川が決して主人公の心理の、あるいは作者の観念の仮託物ないし比喩ではないということです。》

《その物は、も早人間に対立するものとしての物、人間に認識され、理解され、利用されるのをおとなしく待っている漠然たる可能体としての物ではありません。それ自身の存在の必然性と強度とを持ったそれぞれに絶対の個物です。ゴッホが描いたあのベッド、椅子、パイプを思い描いていただければよろしい。昔からどこにもある粗末な木製の椅子が、ゴッホの眼に見られたとき、あの椅子になったのでした。そして今、この主人公の眼の前で、小川が小川である確かさを現わします。風が風になり、小川が小川になります。》

《つまり小川の流れがありのまま見えたということは、この主人公がもはや地上で自分を救うものは何ものもない状態にまで立至ったことを証明するのです。そしてこのような絶対の絶望は直接に表現することはできない。物としていわば間接にしか表現されない。観念をそのように物として表現するのが芸術に他なりません。ナマの形でもちこまれた観念ないし思想は、ある種の読者を誘惑するオトリにしかすぎないと、前に私の書いたのはその意味です。》

《観念》を《物として表現する》のが《芸術》なのだとされ、『野火』の文章が具体的に検討されている。ここでは、物語的な意味づけや比喩としての可能性を排し、《物》そのものとして事物を捉える言葉こそが、《芸術》としての《文学》の価値を生み出すのだと明確に主張されている。それは、言葉そのものが、物語や比喩を介入させることなく世界を捉えることができ、それこそが《文学》なのだという主張でもあるだろう。そして、このような日野の評論は、《文学》をそれ自体として価値づけるものとして、一定の意義を持つということができるはずである。

ここまでをふまえて、次のようにいうことはできる。すなわち、日野は『ベトナム報道』以前の評論において既に、日常的な現実を支える物語的な機能を持った言葉について、それを批判的に考察していた。それは、現在でも充分にその意義を認めることのできる内容を持っていたのだと。

しかし、本稿における問題はそこにはない。『ベトナム報道』から振り返ってみれば、日野は、このような評論における「言葉」の問題を、自ら《文学的》といってしまう態度の内にいたのである。つまり、そこには日常的な現実を支える物語的な言説が留保されていたのであり、あくまでそのような言説とは異なるものとして《文学的》な言葉が思考されていたといえるのである。ただし、そのことを不徹底だと責めるべきではあるまい。人

は、言語について鋭く認識しつつも、いわゆる「日常」を生きるのであり、日野にとってはその日常が「新聞記者」であったということなのである。

しかし、日野においては、その「日常」が「非日常」となった。もしかしたら、それこそが作家日野啓三の誕生を促したといえるのかもしれない。

もう一度考えよう。日野の評論は、確かに物語的な日常や意味づけられた事物に対する違和感と、それを超える可能性を探ろうとするものであった。しかし、それら評論の「言葉」は、正確に説明し、正しく説得しようとする「言葉」ではなかったか。当然である。いかに「非日常的」な認識であろうと、それを説得的に開陳しなければ、意味不明な迷妄でしかない。

だが、日野は、評論の言葉を《文学的》と考えた。一方には、非《文学的》な言葉、つまりは、ベトナム以前の「新聞」的な言葉が想定されていたのであろう。しかし、日野自身のベトナム体験は、「新聞」の言葉においても、物語的な縛りを排した、自由な言葉が求められていることを知らしめるものであったといえるだろう。つまり日野は、評論と同じ水準の「言葉」によって新聞記事を、そして『ベトナム報道』を書くしかなかったのである。そのことは、結局それらの言葉がすべて、説明し、説得する言葉であったことを、日野に強く意識させたのではないかと考えられるのである。

三　『ベトナム報道』の言葉

『ベトナム報道』は評論と同じ水準の言葉によって書かれたと述べた。そのように書かれた『ベトナム報道』には、『向う側』以下の小説の言葉と非常に似通った言葉を見出すことができる。

《だが、そうしてサイゴンの空気の中に次第にはまりこんできたということは、サイゴンそのものの、どうにもやりきれない絶望と疲労と悲しみが、全身の毛穴からしみこんでくることでもあった。何か起こっているのではないかと不安に駆られて、絶えず街をうろつきまわる必要がなくなるにつれて、私はよく中央広場の石のベンチに夜更けるまで一人で座っていた。（略）夜更けても去らない熱気を含んだ夜気がねっとりと体中にまといついてきて、ひどく不条理な、無性にもの哀しい感じが、心の底にこたえる。（略）ベトナムそのものが体中の毛穴から私の中に滲みこんでくる。》

ここには、まさに《客観性》の《神話》を逃れた、日野自身の感慨としかいえない言葉が記されている。《毛穴からしみこんでくる》というのは、日常的な現実世界では比喩でしかありえない。だが、日野は、そのようにしか言葉にできないものとして記したのであり、日常的な了解を逸脱して、言葉によってリアルな現実を捉えようとしているのだといえるかもしれない。それは、日野

が、ベトナム戦争を取材し報道することを、自らの存在を賭して行わざるをえなかったからであり、そのような感慨を基盤とすることなしに「言葉」が生まれてこなかったからである。そのことは、『ベトナム報道』の中に、次のように記されてもいる。

《私たちは対象の渦中に投げこまれ、波にもまれ、否応なく事実と非事実の区別、公正な認識と価値判断の境界を、整然とは判断できなくなった。そこで私たちが頼りえたものは、私自身の眼、皮膚感覚、自然な一種本能的な頽廃的で不健全なもの、力の濫用への嫌悪感、その反対のものへのひそかな共感といったものだった。》

そして、そのような自覚の中で書かれた『ベトナム報道』では、最後に至って自分自身の中にある《大文字ではじまる〝人間〟》、《生命そのものの価値判断》が見出される。日野は、近づいてくる武装警官の構える銃剣に対して《私の心の底で「ノン」と何かが叫んだ》といい、それは《私の頭の判断ではなかった》として、次のように『ベトナム報道』を閉じている。

《私の中の人間――大文字ではじまる〝人間〟の判断だと不意に私は気づいた。

おそらくもともと処世の知恵に弱いうえに、連日の仕事に疲れ切った私の頭は、個人的な利害得失の運動をほとんど停止していた。もしこういう大げさな言い方を読みすごしていただけるなら、あの頃の私は〝無心〟に近い状態だったのだ。だから私は自分の感覚と価値判断をあえてタイプに打ちつづけて、後めたい気持ちがなかった。

いま東京でも同じ心の状態だとはいわない。だが、新聞的文章の規範も忘れ、事実と真実の形式論理的区別も消え、憑かれたようにして内側から湧いてくる想念と言葉の列をそのままにタイプにローマ字で叩きつけていったサイゴンのむし暑い夜の底で、私は〝真実〟に近かった。つまり私の内部の最も奥深くを流れる、生命そのものの価値判断の声に忠実だったと思っている。》

それでも、ここにあるのは、徹底してリアルに「伝達」しようとする言葉ではないだろうか。日野は、ベトナムの現実を、そしてそれを新聞記者として伝えることの難しさを、徹底してリアルに「伝達」しようとしたのであり、それが『ベトナム報道』の達成なのである。

いかに「文学的」に見える描写があろうとも、それが文学なのではない。いかに「個人的な感慨」としかいえない言辞が費やされていようと、それが文学なのではない。それは、日野の評論が論じてきたことでもあった。

そして、ここから〈評論では捉えられない〉〈リアリティー〉を捉える方向に向かおうとすることは、日常的な意味での「伝達」を諦めることではないだろうか。『向う側』、『広場』、『炎』といった〈小説〉には、日常的な意味での「伝達」に対する諦めが込められてい

るのかもしれない。[10]

我々が生きる物語的な日常は、決して盤石で揺るぎないものではない。『ベトナム報道』は、動乱の中で存在を賭して実感された現実を、リアルに伝えようとした。だが、そのリアルさは、どこか救いがない。もちろん、明るく楽しい物語的な「救い」を求めているのではない。だが、〈評論では捉えられない〉〈リアリティー〉を求めようとした日野もまた、どこかに救いを求めたのではないか。

実は脆弱な、物語的な日常の光景がある。その光景に入る亀裂を予感しつつ、それに備えるための言葉、それこそが小説であることを、動乱の真っ只中、日常に生じた亀裂の底から、「特派員の証言」は示唆するように思われるのである。

注

（1）「審美」二号、一九六六年三月。

（2）「南北」一巻一号、一九六六年七月。

（3）「三田文学」一九六六年一一月。

（4）日野啓三自筆「年譜」（「文学界」一九八七年四月）。

（5）（4）に同じ。

（6）現代ジャーナリズム出版会、一九六六年一一月。（4）の「年譜」に続く「著作リスト」において、同書は「長篇評論」とされている。

（7）「近代文学」一〇巻六号、一九五五年六月。引用は『存在の芸術』（南北社、一九六七年一一月）に拠る。

（8）（7）参照。

（9）「近代文学」一二巻七号、一九五七年一〇月。引用は『幻視の文学』（三一書房、一九六八年一二月）に拠る。

（10）これら三作の詳細については、拙稿「日野啓三『向う側』論―言葉の外部へ向かう試み―」（「近代文学試論」第三一号、一九九三年一二月）、拙稿「日野啓三『広場』論―物語を拒む小説―」（「国語教育論叢」第六号、一九九七年三月）、および拙稿「日野啓三『炎』論―倫理を問う小説―」（松江工業高等専門学校紀要第三二号（人文・社会編）、一九九七年二月）をご参照頂ければ幸甚である。